

interview

佐藤 達也

Tatsuya SATO 書家

愚直な若者が開ける
大きな風穴取材・文/神谷 真理子
Text by Mariko KAMIYA

書の合宿

清々しさとはこういうことなのか。そう思わせてくれた若者たちに出会いました。二〇一四年、夏、二十代の若者たちによるグループ書展「僕らの書展二〇一四」が東京芸術劇場で開催されました。

展示された作品群はエネルギーで個性。天井ぎりぎりまで使って書いた大作や、アクリル絵の具を墨に混ぜて洋紙に書いたものなど、若々しいチャレンジ精神にもあふれていました。力が入りすぎて破れているものや抜群のセンスで空白を演出するものなど、エネルギーが紙の上で弾けています。どの作品からも情熱とパワーが感じられ、若さの中にも凛とした美しい佇まいがあり、会場は清澄な空気に満ちていました。

リーダーの佐藤達也さんが初めて書道仲間を募ったのは二〇〇九年。現在、平成生まれの男性七名、女性二名の計九名で活動しています。二年に一度、展覧会を開催し、平成の書を模索しています。

このグループの特徴は、作品発表前に一同が集まり、ともに作品を書く錬成合宿です。他団体が作品を持ち寄るだけの展覧会なのに対し、「僕らの」は寝食をともにしながら絆を深めていきます。社会人や大学生となった今でもこの方針に変わりはありません。

書道部のメンバーはみんな優秀。自分だけがうまく書けない。それが悔しく、うまくならないという一心で書き続け、書に明け暮れました。

「佐藤さんの姿に憧れる人がたくさんいました。近隣高校の間でもちよつとした有名人でしたね」
こう話すのは、「僕らの」仲間の伊藤聡美さん。村松先生が退職を機に開いた個人塾の生徒で、佐藤さんに憧れて書の道を志した後輩の一人です。彼女の言葉を借りれば、佐藤さんのように何かに情熱を注いでいる人はいなかった。臆すことなく書にむかっている彼がうらやましくて、少しでもその影響を受けたいと思った、と。

その言葉の端々から、佐藤さんの書に向き合う姿勢、考え方、人柄すべてに尊敬の念を抱いていることが窺えました。

教師と書道家、二足のわらじ

「毎日、墨を摺っています。四、五時間は摺っていますね。歯を磨くのと同じで、習慣になっていきます」

佐藤さんの日常を聞いてみると、こう返ってきました。

三時ごろに帰宅し、七時くらいまで墨を擦り、夕飯を食べてから少し仮眠をとって、夜中の三時頃まで書にむかいます。それが

書にめざめる

今回で三回目となった「僕らの書展」に備え、毎月合宿を行いました。仲間の作品や制作風景を目の当たりにし、互いに意見を交換します。そして、夜な夜な書道談義に花を咲かせ、明日の一書へと、夢を語り合います。

「書をやっているときが楽しくて仕方がないんです」と、満面の笑みで話す佐藤さん。書への思いを切々と語る姿はまるで、愛する恋人へのそれかと思わせるほど一途で情熱的。

彼らは月に一度、それぞれが作品を持ち寄り、研究会も行っています。合宿同様、書への熱き思いがぶつかり合い、容赦ない直言直行の言葉に涙を流す一幕も。仲間でありながらライバルでもある同志に、一切の遠慮はありません。あまりに白熱しすぎて時にはつかみ合いになることもあるのだとか。しかし書から一歩離れると、なにごともしなかつたかのように笑って話せる間柄。書という固い絆で結ばれた、真の友情がなせる技です。

「いつか、どこかで、『青春だね』って言えたらいいと思います」

青春という言葉を使わなくなって久しい現代にあつて、彼らの活動は青春そのもの。青春が似合わなくなつた若者たちや、青春を謳歌していたであろう「かつての若者」たちへ、青々と茂る若葉の森に吹き抜ける、一陣の爽やかな風をお届けしましょう。

「僕らの」のメンバーは「平成生まれ」が条件だという。佐藤さんは、もちろん平成生まれの二十代。平成二年、栃木県鹿沼市で生まれました。父と祖父は野球を、祖母はママさんバレーに励むというスポーツ一家です。弟はサッカーに、当の佐藤さんも高校に入るとラグビー部へ入部しました。

「意気込んでラグビー部へ入部したのですが、骨折を機に退部しました。ラグビーをやめて喜んだのは書道部顧問の村松太子先生で、『骨折してよかったね』と言われました(笑)」

小学校のときに書道教室に通っていたこともあり、高校ではラグビー部の他に、部活には出ないものの書道部にも籍を置いていました。というのも、佐藤さんは、スポーツよりも芸術に興味があつたのです。幼い頃から母親と洋画などの展覧会に行くことも多く、小中学校の頃には、家から自転車で一〇分ほどの場所にある、版画家の「川上澄生美術館」に一人で足繁く通っていました。芸術への思いは高校生になってからも変わらず、都内の美術館まで足を伸ばすこともたびたびありました。

そんな佐藤さんが、書にのめり込むのに時間はかかりませんでした。今まで何をやってても長くは続かなかつたことが嘘のように、書にどっぷりとハマってしまったので

ん。しかし彼は、すでに書家として生きる覚悟が芽生えていたのです。

大学時代には、「僕らの書展」を二回、大学卒業時には個展も開催しました。また、当時、大学二年生だった佐藤さんが東日本大震災の直後に書いた『海』は、二〇一三年、現代書部門における登竜門ともいえるべき国井誠海賞を史上最年少で受賞。まだ大学生であった佐藤さんの受賞はサプライズであり、大きな話題となりました。これが書家としての励みにつながったのです。

書家と教師の二足のわらじを履くという選択肢もあったでしょう。ただ、佐藤さんにそれはありませんでした。恩師から教員採用試験を受けたらどうかと勧められたことに対して、丁寧に断りました。書にかける時間を優先したい。もつと書を書きたい、勉強したいと思ったのです。後輩たちが憧れた、ひたむきで真っ直ぐな佐藤さんだからこそ、力を二分することに抵抗があったのです。今は非常勤講師としてどれだけの書をやれるかを模索しています。

こんなエピソードがあります。
二四時間解放された大学の書道教室は、作品制作には最適です。佐藤さんは、ひとりきりで書くために深夜二時、近くに住む伊藤さんに声をかけました。小さな彼女の背中に大きなタライを括りつけ、自分はジャージ姿で大筆を担いで二人で歩いていく。どうみても、異様な光景です。警察が



【僕らの書展】のメンバーと師の柿下木冠氏。前列右から二人目が佐藤さん

二人を呼び止めたのも無理はありません。大筆が、人の首に見えたというのですから。くわえ、書道教室を汚したといつては反省文を提出することもあったそうです。しかし、それでもやめることはなかったそうです。

師に見守られて

佐藤さんや仲間たちにとって、なくてはならない人物がいます。

柿下木冠氏。佐藤さんが大学入学時より師事している方です。独立書人団の創始者、手島右卿の系譜をたどる山崎大抱の高弟であり、大抱亡き後、その志を引き継ぎ、独立書人団常務理事、抱一會理事長として活躍している書家でもあります。柿下氏は、彼らの「相談役」として、つねに傍らで見守っています。

『僕らの書展二〇一四』の作品選びのとき、先生は何も言わず、ただ見ていらつしやいました。並んだ作品を前に、じーっと黙って座られていたんです。自分たちで選べ、と。それがかえってプレッシャーでした（笑）。でも、選び終えた後、先生はひとつしゃってくれたんです。ほんとうにうれしかったです。

会期中、一〇〇〇人も来場者があった「僕らの書展二〇一四」。新聞や雑誌にも多

できるのも、時間にゆとりのある職場環境があるからだそうです。
「そういう環境にいるということがありがたいです」

高校を卒業と同時に書から離れた部員たちとは違い、佐藤さんは書が続けるために東京学芸大学教育学部（書道専攻）に進学。卒業後は書道の講師として高校で教えることになりました。それを選んだのは、大好きな書をするため。だから、今は教員採用試験を受けない。受けたくない、と言い切ります。正規の教員でも好きな書を仕事にできるのだからいいのではと思うのですが、どうやらそれは、ちがうようです。

「教える書道と自分の目指す書はちがいます。自分で制作しているときはいいのですが、指導となると生徒たちに僕が感じている書の楽しさ、おもしろさをどう伝えればいいのか、と。僕は書が好きですが、生徒がみんなそうかといったらちがいます。ですが、書の喜びを知ってもらいたい一心で教壇に立っています」

昨年一年間は、常勤講師を務めていました。そのとき、佐藤さんはスランプに陥ったといいます。社会人一年目ということもあり、それまでの自由な環境から一転、社会や組織のなかで生きるということに戸惑いを隠せませんでした。これだけを聞くと、社会人には避けては通れないことなのだから仕方がないだろうと思うかもしれませ

く取り上げられたそうです。師の目だけではなく、自分たちで選んだものが反響を呼んだということが、さらに大きな自信へとつながりました。

「僕らの書展」が他の展覧会と一線を画するのは、錬成合宿のほかに、自由に発想を膨らませてのびのび活動しているところ。書をはじめとする日本が誇るべき伝統芸能、伝統文化は、一方で縦社会の悪しき風習が未だ残っています。出る杭は打たれる風習など、日本のムラ社会構造の縮図と言っても過言ではないでしょう。佐藤さんたちも例に漏れず、いろいろあったとか。どの時代も前例を破る若者たちは、異端視されてしまうものなのでしょう。彼らが、草木を芽吹かせる風を運んでくるとも知らず。

佐藤さんが昨年のスランプを脱したのは、その『風』がきっかけでした。もやもやしていた自分から抜け出すために、ひたすら『風』へと魂を込めて書きました。

書に明け暮れた学生時代。山崎大抱の書に魅せられ、筆一本で生きてきた師匠・木冠の生き様に憧れ、自分もその道でと心に決めた。心に感じるままを書き表現したい。型にはまらない、縦横無尽に吹きぬける風のように。書いて書いて書き続けた一年半。佐藤さんの心の中に吹き抜けた「風」はようやくやく出口を見つけ、紙の上にもその姿を表したのでした。

interview

できない理由ではなく、できる理由を

「『書の本源』とは、一口に言えば、作者と、その人間にまつわる一切のものと見えよう」。山崎大抱は、そう書き残しています。つまり、書は作家の生き方そのもののだということ。

「書も続けていけば、いずれ技術はついてきます。しかし、うまいということだけがよいのでしょうか。技術は必要ですが、そこにプラスのなにかが欲しい。そこで以前よりも書以外の芸術に積極的に触れるようになりまして。いろいろな芸術に触れることで何かを感じ取り、それを自分なりに還元していく。そういう時間を増やしています」

なにか少しでも興味のある展示会があるところへでも行く。自分の部屋は好きな本だらけで足の踏み場もない。暇があれば、本をめくる。もちろん、テレビも見ると音楽も聴く。目にする、耳にするすべてのことからなにかを得ようと佐藤さんはいつも感性を研ぎ澄ましています。収入のほとんどを書道用具と書籍、芸術鑑賞につき込み、ときには在来線を乗り継ぎ、片道六時間以上もかけて展覧会を観に行くこともあるのだとか。

書は瞬間の芸術だからこそ、いつもベストな状態で挑みたいと佐藤さんは言います。一回でうまく書ける場合もあれば、数

百枚書いてもまったく書けないこともある。だからこそ、その瞬間をとらえるために、作品制作に臨むときにはベストな状態を保っていたい。自分が一番いいと思う紙、筆、墨、そして一番いいと思う体調や精神状態で挑む。それでうまく書けなければ、自分が未熟なのだとわかるから、と。

「言い訳をしたくないんです。ベストの状態でも、結果が悪ければそれは自分の腕がまだまだだということですから、自分の腕を磨くしかない。逃げ道をつくると、自分の腕はそれ以上伸びませんから。書作品は、いついもの書けるかわからないし、たとえできたとしても、それがすべてではなくて、答えのないものです。だからおもしろい。その数少ない瞬間をとらえないわけにはいきません」

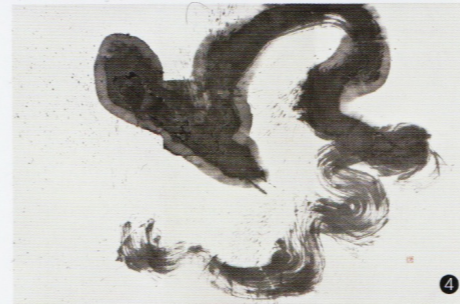
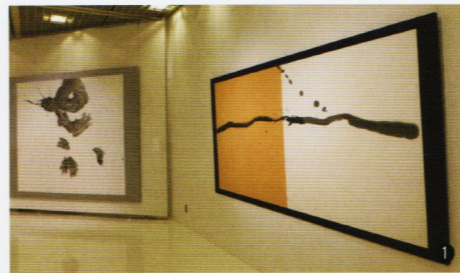
沖繩・興南高校野球部の我喜屋優監督は、「根っこがすべて」といって選手たちの平常心を養うために、日常生活のあらゆる生活態度を改善させました。

その結果、二〇一〇年の甲子園春夏夏連覇という快挙を成し遂げたことは有名です。我喜屋監督は、寒い地方なら寒い地方なりに、暑い地方なら暑い地方なりの練習方法があるのだといって、言い訳はいつさい許しませんでした。

佐藤さんが言い訳をつくらないというのもこれと同じ。自分が生み出すものには必ず、ありのままの自分が表れてしまう。逃



①『僕らの書展 2014』のひとつ。若者らしい、斬新な作品が多い
②『僕らの書展 2014』のひとつ。躍動感に溢れている
③練成合宿の光景
④佐藤さん作品『風』



げれば逃げている気持ちが作品に表れる。だから、いつでもベストな状態にしておくことが大切なのだ。それが、彼の信条なのです。

愚直な若者が世の中に風穴をあける

「僕らの」メンバーは固定ではありません。これまで、何人もの若者たちが仲間になり、去って行きました。社会へ羽ばたいていく過程で、ただ好きなだけでは続かないということに気づくときがきます。ましてや、いつでも真剣勝負の「僕らの」ですから、書とどのように向き合っていくのか、どういう思いで書くのかという明確なものがないと続かないことはむしろかたしれません。

「僕は、なにかに縛られず、自由に書きたい。それに賞をとるために書くことはしたくありません。どこの団体に属しているとか、誰の下についていけば賞が取れるんだとか、そんなことは関係ないし、書の本質ではないと思っています。作品がすべて。自分の力は作品でしか測れないと思います」

佐藤さんは、悩みを引きずりません。たとえうまくいかなくても、その時はそれでいいんだと思ひ、また次のチャンスをつかみたいといひます。過去を引きずることも、未来を憂うこともせず、今はできることだけをやるだけだと懸命に書を書きます。

先輩の書家たちは、彼らの自由な発想に感嘆しつつも、複雑な思いを抱かずにはいられ

ないかもしれませんが。なぜなら、枠からはみ出すということが許されない時代を生きてきたから。あるいは、枠から出ることを恐れたから。

「今の僕があるのは柿下先生のおかげです。この展示会でも、僕らの自由な行動が柿下先生に迷惑をかけるだろうと恐縮していたら、『迷惑をかけるなら、かけてみる』と言われました(笑)。そんな先生は、他にいません。僕は、誰かが敷いたレールに乗るよりも、自ら道を切り開いていきたい。器用な生き方ではないし、はたして道が切り開けるかわかりません。ですが、書を一生続けたいんです。ずーっと書に生きて、歳を重ねたとき、『ああ、命を懸けてやってきたな』と思いたい」

自由を選んだからこそ、その責任を書で果たしたいと佐藤さんは言います。人は自らが建てた城に幽閉されて身動きがとれなくなることがあります。彼らが果たす役割とは、その城に風穴をあけ、風の道をつくること。

今ここに、愚直な若者たちによって、大きな風穴が開かれようとしています。